

大正時代の小林多喜二の評論活動と彼の思想

倉 田 稔

も く じ

はじめに

- 1 「リズムの問題」
- 2 「修身とサウシアリズム」
- 3 ストリンドベルグ論文
- 4 『『下女』と『循環小数』』, および「ジュードとアリョーシャ」
- 5 『小樽新聞』での論争

おわりに

はじめに

ここでは、小林多喜二の大正時代の評論を取り上げる。彼の小説よりも、彼の思想がこれらによってよく分かる。これは多喜二伝記(14)にあたる。

1 「リズムの問題」

小樽高商卒業直前に、小林多喜二は、論文「リズムの問題」を書いた。これはトルソーでもある。ここでリズムとは、実際は、俳句の五七五、短歌の五七五七七のリズムを意味している。このリズムの問題を、彼はつねづね考えていた。友人と議論もしていた。この論文のあとがきで、多喜二はこの出来を控え目に言っているが、実際はこれをかなり自信作と、彼は思っている。

多喜二は、当時勃興していた口語歌の問題についても言及している。彼は、

「口語と古語の区別をもうけない」¹⁾としているので、口語歌運動に同情的である。しかし「・・・短歌改革は慎重に行われるべきである・・・」²⁾と結論している。

全体の結論としては、「自分はリズム本然の姿をもって一つの詩とする自分の前には、所謂詩も短歌も俳句も滅亡さるべきである。・・・あらゆる分野を実質的に包括する真の意味の自由詩あるのみである。短歌家詩家の差別はなく、もっと人間性——表現欲求に根底を置いて、その点からの詩人あるのみである。従って、古語口語、五七五七七、語尾の踏韻、頭韻は問題外である。・・・」³⁾

この議論は、若い。そして余り正しいものではない。

日本の短歌の系統は、1、万葉集、2、古今和歌集、3、新古今和歌集、の系統がある。近代にいたって、1を正岡子規が評価した。彼の歌論として「歌よみに与ふる書」がある。子規は、客観的写実主義（写生主義）をとらえた。2を佐々木信綱が評価した。3の立場に、新詩社の与謝野鉄幹・晶子がいる。彼らは『明星』を出した。⁴⁾この派に石川啄木が加わった。ただし啄木はその浪漫主義から決別した。それに、啄木の口語歌に与えた役割は、間接的だが大きかった。

『生活と芸術』を、土岐哀果が⁵⁾1913年（大正2年）に創刊していた。土岐は、啄木の影響が強かった。『生活と芸術』派の歌人を生活派といい、それ

1) 『小林多喜二全集』新日本出版社（以下、『全集』と略）第五巻、22ページ。

2) 同、24ページ。

3) 同、25ページ。

4) 「日清戦争が終って日本の資本主義は急速に成長し、それともなって個人主義、自由主義の精神の台頭を見、国民としてはこれまで長い間封建的な思想・感情に生きていただけに、爆発的に近代的な自我の解放と確立をめざすようになり、そこで主情的、個性的、英雄的、唯美的といった形容詞そのままの鉄幹、晶子の歌風のもとに『明星派』が形成され」た。（梅沢秀司筆「付論 大熊信行と歌誌『まるめら』（『復刻 まるめら 同人歌集』論争社 1978年 254ページ））

5) 後に、哀果。参考、荻野富士夫『初期社会主義思想論』不二出版 1993年、第8章。小樽の高田紅果（既述）は、初め紅花だったが、哀果の果を真似する。

は1916年まで続いた。主な歌人に、大熊信行（その後の小樽高商教授）⁶⁾、西村陽吉がいた。

正岡子規を開祖とするアララギ派が、大正中期から歌壇で支配権を確立した。『アララギ』は、しかし主観的・観念的に発展してゆき、宗匠主義が確立していったので、批判がおこって来た。それらは、『日光』（1924年創刊）に集まった北原白秋、前田夕暮、川田順、石原順、釈迢空、原阿佐緒らである。彼らは口語歌を主張した。これに並ぶものが『芸術と自由』（1925年、大正14年創刊）であり、口語歌そのものの雑誌となった。アララギ派への批判でもあった。これを西村陽吉らが主宰した。かれらは生活派といわれた。『芸術と自由』に渡辺順三⁷⁾も短歌を発表した。彼らは口語歌に傾いた。口語歌運動の全盛であった。これは、『生活と芸術』の後継誌的性質のもので、無産階級の短歌を標榜した。

青山霞村、西出朝風、鳴海要吉は、口語歌運動の先駆者であった。特に西出朝風の影響下に、北海道ではもっとも多くの口語歌人が活動していた。例えば、伊東音次郎、並木凡平⁸⁾、炭光任などである。ただし革新的自覚があったのではなかった。彼らは『短歌革命』を出す。

『種蒔く人』が、土崎で出され、その後、東京版が出た。その再刊第1号は発禁となり、第2号は3ページ全部が削除、翌大正11年1月号も発禁となり、9月・11月号も発禁になった。発禁にならないものも、伏字・削除だらけだっ

6) 大熊については、拙稿「小樽高商の先生たち」(『商学討究』第45巻1号、1994年8月)、および「小樽高商の第2期」(同、第46巻第3号)を参照。彼は、昭和2年『まるめら』を創刊する。それは、昭和16年休刊となった。

7) プロレタリア短歌の代表的歌人。1894年(明治27年)富山市生まれ。

〔自伝〕渡辺順三『烈風の中を』東邦出版社 1973年。

伝記。碓田のぼる『手錠あり——評伝・渡辺順三』青磁社 1895年。

参考) 渡辺は、徳永直と共著で『唯物弁証法読本』1932年を出す。

作品、『日本の地図』1954年；『波動』戦後の歌集。

渡辺順三研究は、『新日本歌人』1989年2月号に、3つあり。碓田のぼる「渡辺順三における家系の研究・序論」、碓田のぼる「渡辺順三執筆 年譜(戦前編)」など。

8) 既述。拙稿「小林多喜二伝——小林多喜二と小樽—— 庁商時代、後半」(『人文研究』88)参照。

た。

渡辺順三は、この『種蒔く人』に興味をもち、投稿する。渡辺は、第1歌集『貧乏の歌』（1924年）を自分の印刷屋で印刷し、東華堂書院で発行した。これは啄木の影響が強い。そして彼は生活派の歌人とみられた。

以上、多喜二がこの論文を書くまでの動きである。並木凡平たちの活躍で、多喜二は口語歌運動をよく知っていたであろう。そして彼はその運動に賛成した。この彼の考えは、ほぼ間違いではない。

さて、その後の話である。

『種蒔く人』の後身として、1924年6月に『文芸戦線』が創刊された。『アララギ』に所属していた松倉米吉（明治28年 新潟～大正11年）や山口好（明治28年 大牟田～大正9年）などがいて、かれらは当時は生粋の労働歌人であった。

渡辺順三は、花岡謙二と共に、口語の短歌誌『短歌革命』を1926年から出した。1926年に口語歌人大会が開かれ、23名が参加した。ここで新短歌協会が結成された。口語歌運動の協会である。『芸術と自由』が機関誌になった。だが形式と内容について論争がはじまった。つまり定型（三十一字）と非定型との論争、何を歌うべきかの論争である。渡辺は、歌集『生活を歌ふ』（1927年 紅玉堂）を発行する。

昭和2年1月、『まるめら』が、山形県米沢市で発行され、大熊信行がその指導者だった。佐々木妙二（小樽高商卒業生）も加わった。第4号に大熊が、「無産派口語運動への一瞥」を書いた。そこで彼は、1926（大正15年）年発行の浅野順一の『戦いの唄』を推賞した。そして、「口語歌運動が階級意識に基く文学上の一般的運動と結合されようとする兆候あるを看取するときに、我等の注意は改めて緊張せざるを得ない」「口語歌こそ、口語歌のみ、プロレタリアのもの、明日の大衆のものだ」と書いた。

翌月5月号の『まるめら』に、大塚金之助の「無産者短歌」が発表された。

大塚金之助（1892-1977）は、経済学者・社会思想史家としてまず有名であるが、歌人としても高名であった。大塚金之助は、アララギ派の歌人として

出発した。初め島木赤彦に師事した。長い留学から帰国し、マルクス主義経済学者として高名になった。歌人として彼は、ブルジョア短歌からプロレタリア短歌へ轉身した。⁹⁾ さて大塚のこの文章で、はじめて短歌の階級性が明らかに論じられた。そして社会主義的芸術観の立場、無産階級の立場からのみ、短歌の表現形式、用語、格調、気魄、精神が根本的に変革され、伝統有産者短歌に対して根本的に批判を与えると言った。そして全被圧迫無産階級解放の熱情に基いてこそ、短歌の革命は可能であることを主張している¹⁰⁾。この歌論は、大切な歴史的エポック・メイキングな文献である。プロレタリア短歌運動の出發にとって、きわめて重要な役割を果たすものとなった記念碑的論文であった。これは近年、『大塚金之助著作集』第9巻に所収された。この1927年に、大塚金之助は東京商大教授になった。

既成歌壇の結社内にも、伝統短歌への不満、封建的な宗匠主義、閉鎖的な結社制度への批判が¹¹⁾台頭してきた。『アララギ』の伊沢信平、『ポトナム』の坪野哲久らが、短歌革命への動きを示した。このような時期に、大塚や大熊の文章が発表されて、短歌革新運動にはっきりした方向を与えた。『まるめら』は、当時の短歌革新運動の推進に大きな役割をもつようになった。同第6号に萱沼が「アララギズムの批判」、8号に「アララギと静寂主義」をかき、茂吉、赤彦らの封建性、反時代性を批判した。

『芸術と自由』では、定型、自由律の論争がはげしくなった。渡辺、西村は定型派、石原純らは自由律派であった。多くがここから脱退した。

『短歌雑誌』に、昭和3年2月から、石樽茂(=五島茂)が「短歌革命の進展」を連載し、アララギなどを批判した。それに対して、アララギの齊藤茂吉らが反撃した。

9) 大塚金之助歌集は3つある。生前出版は、歌集『朝あけ』(1947年)である。没後に、『歌集 人民』(新評論 1979年)が出た。3千部であり、これは生前に準備していた。ついで『大塚金之助著作集』第9巻「歌集・歌論」(岩波書店 1981年)である。

10) 『大塚金之助著作集』第9巻 391-3ページ。

11) 渡辺, 101ページ。

新興歌人連盟が、昭和3年9月に結成された。各結社から集まって、30人あまりが10月に創立大会を開き、機関誌を『短歌革命』とした。土岐善麿、矢代東村、大熊信行、大塚金之助、五島美代子、渡辺らだった。しかし雑誌問題ですぐ分裂した。浅野、伊沢、坪野、渡辺、大塚金之助、浦野敬、土田秀雄ら10名が脱退した。彼らは無産者歌人連盟を作り、『短歌戦線』を機関誌とした。編集発行人は伊沢、印刷人は渡辺で、渡辺の光文社で印刷した。これが初めてのプロレタリア短歌運動の機関誌とされる。

こうして新興歌人連盟は解散した。当時の新興歌人は20才台の人が多かった。渡辺は、評論集『階級戦の一隅から』（1929年 紅玉堂）を出した。無産者歌人連盟が解散して、プロレタリア歌人同盟が結成された。昭和4年7月であり、創立大会が11月だった。委員長は渡辺である。そこから出す『プロレタリア短歌集』の編集委員として、伊沢、五島、坪野、柳田、前川、浅野、渡辺がなった。この同盟の機関誌として『短歌前衛』が出た。はじめは素人社から、昭和5年3月からマルクス書房が出した。だが10月中止となった。

大会数日後、渡辺は捕まった。当時彼は、三十一文字構成を無視していた。11月から『プロレタリア短歌』を出した。短歌が当時、短詩になっていた。昭和7年1月、同盟が解散し、ナップ[全日本無産者芸術連盟]に合流していき、その詩班に吸収された。だが彼らは、詩ではなく短歌を求め、『短歌クラブ』を創刊した。昭和8年4月から『短歌評論』になった。しかしまだ短詩が多かった。ここに大塚金之助が加わった。

石井光（＝大塚金之助）や速水惣一郎の出現で、ようやく正しい方向がつかめてきた。『短歌評論』で、詩から短歌へ戻っていった¹²⁾。

さて多喜二の説を限定づけたい。

短歌形式についてである。短歌が口語歌であるべきだという説は、全く正しいというものではない。古語でもよい。この点は多喜二も承認している。後

12) 拙稿「大塚金之助と短歌」（『大塚会会報』22号、1995年5月）より。

年、プロレタリア短歌は口語歌でなければならないと、人は言ったが、絶対ではない。形式としてヨリ好ましいといえるにすぎない。さて、多喜二は自由詩を主張し、形式としての短歌などを否定している。だが、短歌は短歌であるから原則的に定型詩であったほうがよい。つまり五七五七七である。ただし、字余りも生ずる。多喜二はつまり、短歌を否定するのだ。問題は、ある意味で簡単である。短歌の否定か肯定かの問題となる。短歌は五七五七七形式なので、これを破れば短歌ではなくなる。この短歌を作りたくない人は、短歌を作らなければよい、というだけである。その人は、短詩、自由律の歌を作ればよい。

短歌形式を破ろうという議論は、すでに述べたように、多喜二発言の後に一時発生した。多喜二の議論はそれに先駆けているから、その点で面白い。しかしその議論は、若いし、勇ましく、事実上誤りである。若気の至りとでも呼べる。

こういう論点は、なぜか、既存の研究者、例えば、津田孝などは取り上げないのは不思議である¹³⁾。現在の常識から見てすぐ判断できることである。

ただし、この多喜二論説は、多喜二がなぜ短歌を捨てて小説に走ったかという理由の一半を説明している、と見なせる。

2 「修身とサウシアリズム」

『クラルテ』第二輯に、多喜二は、評論あるいは感想「修身とサウシアリズム」¹⁴⁾を載せた。

小学校の修身の先生のところに、もと二人の卒業生が来たという。多喜二は、仮想の話を先ずおいて、説き明かす。一人は社会に欺かれた人、もう一

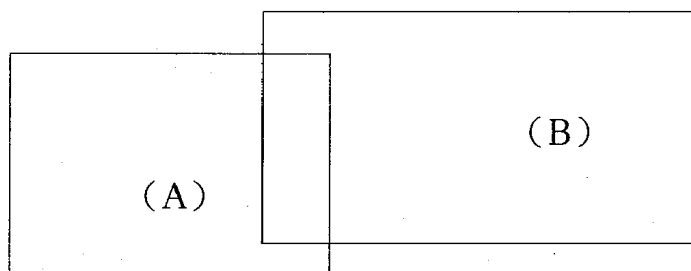
13) 津田孝『小林多喜二の世界』新日本出版社 1985年 初版。とくに、五の2。概して、ある種の多喜二研究では、多喜二の弱点は殆ど取り上げないことになっているように見える。私には、そういう態度は全く信じられない。研究とか学問の名には値しない。他方で、一方的に多喜二を非難するものもある。事実や常識や真実や歴史的相対主義に立たないものである。これも困る。

14) 『全集』第五巻、26-30ページ。

人は社会主義者になった人である。多喜二はこういう評論はうまい。その結論は、こうである。——最も道徳的な人こそ、最も偉大な社会主義者であらねばならない。小学校の修身の教え、つまり「生存権の要求」「平等」「働かざるものは食ふべからず」と、社会主義の原理とは、共通している。——多喜二は、自分で考えたここで言う社会主義に、もちろん賛成している。この評論——手塚英孝は「感想」と言う——は、きわめて興味あるものである。

1つの論点は、こうだ。「自分は先生の教えに従って社会主義者になりました。」と言った、二人目の元生徒のことである。これは多喜二その人の考えであろうか。その可能性は半分ある。多喜二が庁商の黒沼校長の教えどおりに生きたという、安宅氏の指摘¹⁵⁾を思い起こすものである。多喜二が修身を正しいと思い、それを積み重ねて社会主義に至ったというものである。他の考えはこうである。多喜二が修身にかかわりなく社会主義思想に到達した。そしてその後、社会主義思想と修身の共通性をみつけた、というものである。さしあたり、これらのどちらかはわからない。

もう一つの論点は、こうだ。多喜二のいう「単純にして而も絶対なる大真理『生存権の要求』『平等』『働かざるものは食うべからず』——この社会主義の原理」についてである。これを多喜二は本当にそう思っていたらうか。小生は、違うと思う。社会主義の原理にはこれら以外のものがある。搾取の廃止などである。多喜二は学習により、それを知っていた。修身の原理(A) = 社会主義の原理(B), ではなく、(A)と(B)とは重なる領域があるが、同じではない、と知っていたはずである。



15) 拙稿「小林多喜二伝 —— 多喜二、庁商へ ——」(『人文研究』87輯, 1994年3月) 125ページ。

多喜二が(A)と(B)との共通部分だけに賛成していたのではなく、(B)全体に賛成している。

この評論を、分析して紹介するのは、正しくない。総合的に紹介すべきである。

多喜二の社会主義に対する知識・見識の総体が、ここで表明されているのではない。彼の社会主義への理解は、ここで表明されているよりも、広く深い。そう見るべきである。彼はここで、教育的配慮・政治的配慮をしている。社会主義思想に市民権を与えようとしている。それにだけ限定している。

当時は、修身の点から見ると、社会主義思想はとんでもない悪い思想であった。多喜二はそれを、そうではないと主張しているのである。その2つの共通性にだけ焦点をあてている。その政治的配慮は柔軟であり、知恵者としては並ではない。20才を越えたばかりの人物の論評としては卓越している。ただし、当時彼は頭で、社会主義を正しいと考えていたにすぎない。

これは、さきの「歴史的芸術と革命」¹⁶⁾につづいて、彼の社会思想を知る手がかりになる文献である。

3 ストリンダベルグ論文

多喜二は、論文「ユレイ嬢にあらわれたるストリンダベルグの思想とその態度」¹⁷⁾を書いた。

ストリンダベルグは、Johan August Strindberg、現在、ストリンダベリと言われる。1849年生まれの、スウェーデンの劇作家・小説家であり、イプセン(Henrik Ibsen, 1828-1906)と並ぶ近代劇の先駆者である。彼は没落商人と同家の女中の間に生まれた。ウプサラ大学を中退した。自伝的小説『赤い部屋』(1879年)で認められた。1880年に『女中の子』、1893年に『痴

16) 『全集』第5巻, 12-17ページ。

17) 同, 417-139ページ。

人の告白』などの自伝的小説を書く。『父』(1887年),『令嬢ジュリー』(1888年)で名を高めた。その他,小説『ゴシックの部屋』(1904年),『黒い旗』(1904年),『島の農民』(翻訳,岩波文庫 昭和8年)など,随筆集『青い木』(1907-12年)がある。1912年に亡くなった。

多喜二はその『令嬢ジュリー』を論評したのである。ストリンドベリは多喜二にとって,かつて小樽高商の時代から愛読していた作家であり,一時は卒業論文に取り上げようとした作家である。

多喜二は,1924年(大正13年)11月21日の手紙と共に,その論文を,阿部次郎に送った。この少し前に,小樽で阿部は「芸術の社会的地位」という講演会をした。多喜二はそれに参加した。話が終って,主宰者が多喜二に,阿部と話をして行ってはどうかと,言った。多喜二はしかし,「私のようなものが先生とお話するなんて,何となく恐ろしく思われ」¹⁸⁾,多喜二らしくないことだが,帰った。

阿部次郎(1883-1859)は,山形生まれ,東大哲学科卒で,漱石門下だった。著作『三太郎の日記』で有名となった。多喜二もそれを読んでいた。阿部の著作として他に,『世界文化と日本文化』がある。1923年に,東北大学法文学部に赴任して,美学を担当した。だからこの翌年,多喜二は論文を送ったわけである。1945年に,定年となった。『阿部次郎全集』全17巻(角川書店)がある。

阿部は江馬修とともに,ストリンドベリの『赤い部屋』を翻訳していた。だから多喜二が自分の論文を送った相手としては適している。そして,手紙では,「もし,『思想』にでもお紹介して下さるならば,幸甚の至りです。」と,頼み込んでいる。

多喜二は,『赤い部屋』を何度も何度も読んだ。これは,新潮社から大正7年に翻訳出版され,江馬修が英語版を訳し,それに阿部がドイツ語版を利用して改訳したものである。その大正9年版が小樽高商図書館にある。ただしスト

18) 『全集』第7巻,333ページ。

リンドベルヒとされている。多喜二はこれを読んだのだろうか。

この多喜二の手紙と論文は、阿部の死後、それも1970年代に、阿部の遺族が遺品から発見した。つまり、論文は日の目を見なかったのである。阿部は、これが『思想』（岩波書店）にのせるほどの論文だとは判定しなかったのかもしれない。これは、勢いのあるかなりよい論文だが、学術性には欠ける¹⁹⁾かもしれない。

4 「『下女』と『循環小数』」、および「ジュードとアリョーシャ」

評論「『下女』と『循環小数』²⁰⁾」²¹⁾は、『新樹』第9号、1926年5月に掲載された。この最後で、「人が幸福になるにはどうすればいいんだらう」と書く。これは多喜二生涯のテーマであった。

この中で、彼は幾つかの思想の断片をかきつけている。

初めに「世界意識」である。幸福者と、そうでない人、の問題を扱う。

次いで、この評論の一つの本旨が出て来る。下女は無限の労働をしている。社会改造家も無限の努力をしている。だから彼らは似ているし、社会改造家は下女の労働を理解するだらう、軽蔑しないだらう、というものである。

そして、「光栄の日を信じる者は幸福である。」とも言っている。

面白いのはこれだ。

「可愛いマルクスは『共産党宣言』の最後でこう言った——『万国の労働者よ団結せよ！』だから可愛い。」²²⁾ここで「可愛い」というのは、さしあたりこれだけでは読者は意味がわからない。しかし同時期の評論「無題」(=「ジュードとアリョーシャ」)を読むと分る。そこで多喜二は言う。「『資本主義は円

19) いくら大正時代だからといっても、原文からの研究とか、注がない、というような論文では無理だろう。

20) 循環小数というのは、割り切れない数、4割る3、のような無限に小数が続く数を意味している。

21) 『全集』第五巻、31-33ページ。

22) 32ページ。

熟すれば必然的に崩壊することによって、社会主義組織へ移ってゆく』とマルクスが云っている。然し、自分はこゝでマルクスという人は随分お目出度く出来ていると思った。何故って、とうとう『万国の労働者よ、団結せよ』と云っているではないか。²³⁾だから、ここで「可愛い」というのは、「お目出度い」ということなのである。多喜二によるこの指摘は、社会的生産様式の変革の際の、必然と人間の自由意志という一見矛盾する重要問題であった。この問題に気がついた多喜二の頭脳は鋭い。だが多喜二は、この時この問題を解決していない、と見える。

もちろん、これを多喜二が解決していないといっても、無理な話である。マルクス主義の素人であれ、専門家であれ、すぐれた人ならば、この問題は気が付く点であるが、この問題の解決は簡単ではない。御本尊のマルクスもこの問題を十分に論じていない。レーニンは、『なにをなすべきか』で、独自の立場を主張した。それは、マルクスも言っていなかった観点で、革命派ナロードニキ的な、主意主義的なものである。

最後に多喜二は、腹が減った時の意識と、腹が一杯の時の意識を比較する。そして進む。「プロレタリアが待ち望んでいた革命が来、社会組織の変革が行われると、彼らもブルジョアジらしい気持ちに変わって行くのではないかと云ふ意味ではない。」と限定している。しかしこれは、20世紀現代社会主義にとって重大な問題である。多喜二が言うような簡単なものではない。彼が除外した問題は、大きいものとなった。

この評論が載った『新樹』は、小樽の同人誌である。『新樹』第一号に、表紙絵を木田金次郎²⁴⁾が寄せた。執筆者は、第1号では、例えば、小田観蚩である。蒔田が訳を寄せている。佐々木妙二が1つ、片岡亮一が2つ、戸塚新太郎

23) 『全集』第五巻。

24) 木田金次郎は、1893年(明治26年)7月16日生まれで、有島武郎の「生れ出づる悩み」のモデル画家である。岩内で生まれ、1962年に死んだ。現在、北海道の岩内に、木田金次郎美術館がある。

研] 佐藤友哉『木田金次郎』北海道新聞社。

著] 木田金次郎『「生まれ出づる悩み」と私』北海道新聞社。

が2つ、書いている。その他の寄稿者は、小川郁栄²⁵⁾、西丘はくあ、西岡徳蔵、らである。

このころ、1926年6月、小樽合同労働組合ができた。

「ジュードとアリョーシャ」²⁶⁾、あるいは『全集』でいう「無題」は、ジュードとアリョーシャを論ずるものだった。アリョーシャは、ドストエフスキーの小説『カラマーゾフの兄弟』の主人公である。ただし多喜二はそれを一般的人物としている。ジュードは、トマス・ハーディの小説の人物である。多喜二は両者を対比している。ハーディの存在は小樽高商の英語の授業で知ったのであろう。これは、1926年6月17日の脱稿である。6月13日の多喜二の日記では、「『ジュードとアリョーシャ』のほゞ大体の骨組だけを書いた」とある。したがって、それはこの「無題」だろう。

『小樽新聞』1926年7月20日の「文芸消息」欄に、「『緑丘』(第十一号)小樽高商の毎月一回発行の新聞で 本号は七月十二日発行 内容は高商内の出来事 催しの報道から「ヂュウドとアリョーシャ」小林多喜二氏・・・」という記事がある²⁷⁾。この多喜二の評価は、『緑丘』第11号(大正15年7月12日号)に発表されたわけである。ただし、復刻『緑丘』(不二出版)の同号には、1-2ページが脱落とあり、3-4ページしかない。そこには多喜二のその文がない。だから多喜二の稿は、1-2ページに載ったのかもしれない。

5 『小樽新聞』での論争

『小樽新聞』で小さな論争が起こった。

多喜二は、「シェークスピアよりマルクスを」²⁸⁾を、『小樽新聞』1926年11月

25) かつて片岡が好きで、多喜二も好きになった女性である。既出。

26) 『全集』第五卷, 443-450ページ。

27) 『小樽新聞』同日 第三面。現代漢字にした。誤字1字を改めた。; 『全集』第五卷 495ページも見よ。

28) 『全集』第五卷, 33-34ページ。

17日、第三面「萬華鏡」の欄で書いた。「田口生」の名で投書したものである。田口とは、多喜二の恋人・田口瀧子の姓である。ここで多喜二は、高畠素之²⁹⁾（たかばたけ もとゆき）の『マルクス十二講』を絶賛している。そして多喜二は、「シェクスピア、ゲェテを読む先に マルクスを読んだ方がいいと。」³⁰⁾人に薦めている。「マルクスは専門の研究ではなく現代社会人の常識でなければならない。」³¹⁾と。

多喜二が推薦した高畠の『マルクス十二講』は、マルクス思想の解説書であり、当時よく読まれた。高畠は、キリスト教から社会主義にちかずき、1910年に、堺利彦の売文社に入った。マルクス『資本論』全巻を翻訳し、1919-24年に刊行した。これは日本で初めての全訳である。これで高畠は有名になった。後に、国家主義・右翼に転じた。

多喜二の評論に対して、朝野十二（=米山可津美）が「田口氏へ」（『小樽新聞』11月23日）で反論した。同じく「萬華鏡」の欄で、である。

「◇ シェイクスピアよりマルクス を見て 私は未知の貴君に対して 或る種の反駁を試みたくなった。

◇ 本を読むにどれから先なんど順序があるか マルクスがどういふ理由でシェクスピアやゲーテより先にすべきだのか 同種類の本を読むには多少難易によって順序は存在するとして 全く異つた書、加之（しかも）、学術書と芸術書との間に何故に読む順序が必要であるか。

◇ マルクスとシェクスピア、エンゲルスとゲーテ、いずれもモダリテート^{31a)}の関係にあるのではないか、それに、マルクス十二講は 推挙すべくあまりに権威もなく 又それを読んでマルクスを読んだと思ったら大間違いだ。

◇ まあ 翻訳資本論でも読んでから マルクスのブックレビューでもした

29) 高畠素之。1886年（明治19年）-1928年（昭和3年）。群馬県出身。同志社大中退。

30) 『全集』 第五卷, 32ページ

31) 同, 31ページ。

31 a) 様相。ドイツ哲学用語。

まい（朝野十二）」³²⁾

米山＝朝野は、多分、田口が多喜二であると知っているとは推定される。米山は小樽新聞の記者だから、多喜二が筆名を使っても、投書の差し出し人は分かる。それに、『小樽新聞』は、寄贈された書を選んで書評させていた。高畠の『マルクス十二講』も寄贈され³³⁾、これを同社の記者のだれかが多喜二に書評してもらったのかもしれない。もしかしたら、その記者は米山本人かもしれないのだ。

米山＝朝野の言っていることは、常識的には間違いではない。また米山は、多喜二がまだ『資本論』を読んでいないことを知っていて書いている。

多喜二は、それに対して「朝野十二氏へ」³⁴⁾を『小樽新聞』（11月27日）で書いて、反論した。

「其〔朝野の〕頭脳は正に中学生あたりの高さである。」

「文学科の中には社会学も入っている世の中である。」

「自分がマルクスの『資本論』を紹介しようとしたものでなく『マルクス十二講』を紹介しようとしたのです。だから例え資本論を自分が読んでいてもいなくても恥にはならない筈だ。」

「自分は 本書を カウツキーの『資本論解説』、河上肇氏『資本論略解』よりも ある意味でピンと来ると云った迄である。」

さて余談であるが、多喜二は早速、翌年から『資本論』にとりかかることになる。

多喜二の反論に対し、朝野は、「再び田口氏へ」(『小樽新聞』11月30日)で反論した。長いけれども、仲々見られないので、全文を掲載しよう。

「◇ 田口氏は シェクスピアよりマルクス と題したことを記憶するであらう。氏は マルクス十二講、資本論解説等の紹介書を読んで、直にシェクス

32) 小樽商大所蔵マイクロフィルムでは、部分的に、とじ布に覆われていて読めない。小樽市立図書館のマイクロフィルムによった。引用に際し、漢字は現代化し、ふりがな＝ルビは省いた。

33) この本は、小樽市立図書館、小樽商大図書館にない。

34) 『全集』第五巻、34-34ページ。

ピアよりマルクスを世の人に推奨しやうとした傾きはなかつたか、私は残念ながら 未だ阿部氏の三太郎の日記は読んでゐないが、若し人生観の相違によるのであるならば 前に全く客観化して力説する理由はないではないか

◇ 私は中学生の頭脳であるならば 失礼ながら氏は講義録勉強家のそれである、又 文学科中に社会学の存在を示して、シェクスピアよりマルクスを強調しようとしてゐるが、それは全然無駄なことである。

◇ 氏が所謂文学科の文学なる概念は リテラトゥル³⁵⁾にあらずして クルツアヴィセンシャフト³⁶⁾の意である、然らば当然其一種である社会学がその中に挙げらるゝは勿論である。尚又大学のリテラトゥルのコースに於ては法文科を除く此社会学は入ってゐない

◇ 最も具体的な例は 早大専門部政経科^{36a)}に文学概論の講義があり、小樽高商に於ても 簡単なりといえども 哲学概論や、倫理の講義あるを 氏の文学科中にも社会学ある世の中に照合して如何に解するや

◇ 社会学はマルクス以前のものである、純正社会学とマルクス主義、即ち科学と人生論とを誤らんことを望む

◇ 現代の社会科学は 西洋中世のスコラ哲学が専ら羅馬(ローマ)教義の裏付としてアリストートル以後の哲学を曲論したごとく 専らマルクス主義の擁護としてあたかも社会科学部マルキシズムスの如き観がある。此点 スペンサー、コント³⁷⁾以来の純正社会学を一個の科学として確立するを要する マルクス自らが、人生観と科学とを混淆したる失敗は 大西氏「囚れたる経済学」について参照された³⁸⁾

◇ 私は マルクス十二講が資本論解説や資本論略解よりピント来やうが来まいが そんなことはどうこう云つたのではない、単なる自我に期(ご)した人生の一角をあまりに拡大して世人の前に提供せんとしたる田口氏の人生観の

35) 文学。芸術としての文学の意だろう。

36) 文化科学。

36a) 米山は、早大出である。

37) コンーとあるが、コントだろう。

38) 「い。」が抜けているのだろう。

貧弱なる科学化，普遍化，抽象化を難じたのである（朝野十二）」³⁹⁾

素早く書いたらしい新聞の文なので，文がわかりにくい。

多喜二はこれに対して、「頭脳の相違」⁴⁰⁾（『小樽新聞』12月4日）で反論した。「斯ういう表現法の強意と気魄が貴君の如き定規的頭脳しかもっていない人の理解し得る彼方にある。」

これは論争ではなく，喧嘩腰の言い合いになってしまい，決着はつかなかった⁴¹⁾。多喜二は、くやしかっただろう。ただし、常識的に言えば、朝野の議論の方に少し分があるだろう。

『全集』に収録されている「無題」⁴²⁾は，出世をテーマに，寓話風にしたものである。12月20日に脱稿した。これはあまりうまくはない。観念的である。

おわりに

小林多喜二は高商時代に，マルクス主義やアナキズムをよく勉強した。彼は，これらに同情していたし，正しいと思っていたが，勉強は本格的ではなかった。だが，クロポトキンなどを除けば，ほとんど二次文献の読書である。銀行員になってからも，大正時代はまだその状態である。彼は学習によって社会主義やマルクス主義は正しいと思っていた。だが例えば，まだ『資本論』を読んではいない。もちろん，『資本論』が全訳され終ったのが大正13年だから，それは無理もない。他のマルクスの著書も当時は翻訳が少なかった。だから，彼がマルクスそのもの（ドイツ語原文）を読まなかったとしても，非難にはあたらない。多喜二はドイツ語をやっていなかったからである。ただ

39) 注28に同じ。朝野の文の（ ）は，原文ではルビである。

40) 『全集』第五卷，35-36ページ。

41) 多喜二の文は，『全集』で簡単に見られるので，ここでは殆ど引用しない。

42) 『全集』第七卷，245ページ以下。

し、「共産党宣言」くらいは、やさしいので、翻訳を読んでいたかもしれない。よく多喜二が提出・紹介するマルクスの史的唯物論の公式——『経済学批判』の序文にある——も、どこかの書物で引用されたものを彼が利用していたのであろう。なぜなら、『経済学批判』が訳されたのが、1926年（大正15年）だからである。なお、彼はまだ実践活動にも入っていない。

多喜二は、「アナキズムかボルシェビキかと、激論ばかりしていた。多喜二は銀行員としてセビロを着ており、小樽新聞にも書き、同人誌『クラルテ』も出しているときであった。」⁴³⁾

彼の社会主義理解が深まるのは、昭和に入ってからであり、1927年（昭和2年）に仲間と勉強会＝社会科学研究会を行う中で、であった。伊藤整は、多喜二にとって小樽高商軍教事件（大正14年）が運動へ入るきっかけとなったと、言うが、実際は、小樽港湾争議のころである。

43) 笠井清「小林多喜二と風間六三」45ページ。

訂 正

前号『人文研究』90輯、97頁、注7)の 山本薩夫は、誤り。今井正が正しい。小西真弥氏からご指摘戴いた。お礼とお詫びいたします。